メルロ＝ポンティにおける時間と言語

竹　原　　弘

はじめに

現象学にとって，時間の問題は重要なテーマである。フッサールをはじめ，ハイデッガー，サルトル等，重要な現象学者達が時間の問題について，彼等の重要な著作において多くの紙面を割いた。しかしやはり重要な現象学者であるメルロ＝ポンティが時間について主題的に論じたのは彼の初期の主著である『知覚の現象学』の一章においてのみである。彼は主にフッサールの時間論の影響の下に，独自の時間論を展開している。周知のごとく，ハイデッガーは主著『存在と時間』において，時間性から存在の問題へとアプローチすることを試みたのであるが，本論はそうしたハイデッガーの試みに習って，メルロ＝ポンティの時間論から言語の有する本質を説き明かすことを試みた。われわれは時間の中に生きており，したがって時間的存在であり，また言語を語るものとして言語的存在でもある。しかし，時間とは何か，言語とは何か，と問われた場合答えるのは困難である。本論はそうした哲学上の大きな二つの問題を互いに接近せしめることによって，これらの問題に光を当てることを試みる。

全体の構成は次の通りである。

（1）（2）メルロ＝ポンティの時間論，（3）『知覚の現象学』における言語と時間，（4）（5）『知覚の現象学』以降の言語論についての時間的解明

（1）

メルロ＝ポンティが時間について主題的に論じているのは，彼の初期の主

著である『知覚の現象学』の第三部IIにおいてのみである。時間についての断片的な論は他の著作においても見られるが，時間についてのまとまった言及はこの部分においてのみである。原書で26ページ足らずの短い文章の中に彼は，フッサールから受け継いだ時間論を彼独特なものに仕上げている。

メルロ＝ポンティが時間について論ずる場合の，基本的な基盤は，人間存在が現実に世界に直面している現在が，時間性が時間性として成立する基盤であるということ，すなわち人間存在が世界へと関与している，この主体と世界とのある存在関係が成り立っている場としての現在から，時間が時間として現成するということであり，すなわち時間とは客観的な存在に内属するものでもなく，また主体の時間意識に有るものでもないのであり，主体としての人間存在と世界との存在関係としての志向性のうちに時間が時間として成立する基盤が有るのであるということである。

「私が時間と接触し，私が時間の流れを知るのは，広い意味での私の＜現前野（champ de présence)＞――つまりその背後には流れた一日の地平をもち，その前方には夕暮と夜の地平をもった，私が仕事を為しつつ過ごすこの時間である。」[1)]

すなわち，私に対して現前している現象的領野は，それ自身空間的地平をもつとともに，時間的地平をもつのである。つまり，空間的地平として，私が世界へと臨在する中で関与しつつ知覚している事物，それは私が関与している限りにおいて図として浮かび上がり，その背後に，図として浮かび上ることによって私の世界への関与の形態の焦点が定められる事物の地平を構成している空間が広がっている。時間的地平として，私に対して現前している現前野には，私が今日為した仕事の成果としての書類が蓄積しているし，またこれから読み，作りあげるべき書類が有る。すなわち，私が臨在している現象野は，それ自身時間的厚みをもっているのであり，私の過去の関与の痕跡と，私がこれから為そうとすることの展望が，現象野には含まれている。

注1）M, Merleau-Ponty : *Phénoménologie de la perception*, Édition Gallimard, 1945, Paris,（以下 *P. P.* と略す）p. 475.

したがって，私がすでに遠く隔たった過去へと開かれており，また到来する未来へと開かれており，それらをそのように位置付け，私の世界への関与の仕方の中において保持するのは，この現前野においてである。したがって，「すべてが私を現前野へと送り返すが，そこでは時間とその諸次元とが介在する距離もなく究極的な明証性のうちに親しく現れる根源的経験である。未来が現在へ，そしてさらに過去へと移行するのが見られるのも，ここにおいてである。」[2)]

つまり，私が世界へと関わっていることによって開かれる現前野へと関与するこの現在において，未来は現在へと到来し，過去へと移行するのである。つまり，現前野は時間が時間として現成する根源的領野であり，私が面しているそこにおいて，時間が分節され，位置付けられ，あるいは時間の移行が為されるのであるといえる。現前野において，過去は重く私にのしかかり，私の現前野はその時間的な厚みにおいて，私に自らを提示するのである。

私の現前野において，時間が分節し，時間が現成してくるのは，私が現前野において私を取り囲む状況を存在論的に組み換えるために，何らかの乗り越えを為すがゆえであり，そこに「現在の未来に向かっての炸裂あるいは裂開」[3)]が生ずるがゆえである。そうした私による私の状況の乗り越えとしての企投において，未来は私の現前野に到来し，その結果現在は過去へと押しやられるのである。そして，私はそうした私による私の状況の乗り越えの絶えざる試みにおいて，来たるべき未来をあらかじめ描き出し，私によるその乗り越えへの試みにおいて，過去へと押しやられた私の現在を私は私の存在において保持している。そうした志向性によって私は世界の内に自らの存在を確保し，私の世界を私の状況たらしめているのである。

「私を周囲世界の中に繋留するそうした志向性を，フッサールは未来把持（protension）と過去把持（retension）とよんでいる。これらの志向性は，中心的な＜私＞からではなくて，いわば私の知覚野そのものから発するので

2）*Ibid.* p. 475f.
3）*Ibid.* p. 487.

あり，この知覚がその過去把持の地平を背後に引きずり，その未来把持によって未来へと食い込んでいるのである。」[4)]

そうした未来把持，過去把持は，私の現前野，知覚野から発するのであり，自我としての私から発するのではないのである。つまり，現前野は，志向性の交錯態であり，そこにおいて，現前野を構成する私の状況の乗り越えの契機が潜んでおり，私が未来を描き出し，過去を保持するのは，私が面している現前野においてである。すなわち現前野において，私は私の状況を構成しているのであり，そこから私は私の未来を描き出すのである。つまり，その現前野に潜んでいる，私の未来への乗り越えによって組み換えられる新たに到来するであろう私の新しい状況を予測するのであり，またその乗り越えによって，現在から過去へと押しやられた過去を保持しているのにほかならない。すなわち，私と世界との錯綜態としての現前野において，過去把持と未来把持は発するのである。

そして，私による私の状況の乗り越えの試みによって，新たな瞬間，つまり私の世界との新たな交錯態が出現することによって，過去へと押しやられた瞬間はある変容を蒙る。つまり，現前野から逃亡することによって，過去へと移行した瞬間は，それが現前野から移行する限りにおいて，つまりもはや現前野として私へと現前していない限りにおいて，変容する。それは時間の層というフィルターを通して見られるのである。すなわち，私による私の状況の乗り越えの試みによって，私の存在によって追い越されたかっての現在は，それが私による乗り越えを通して見られるがゆえに，変容を蒙る。かっての現在は，私による乗り越えによって，私の現前野ではない限りにおいて，すなわち現前野から逃亡する限りにおいて，いい換えるならば，私の「いま」を構成しない限りにおいて変容するのである。

「新たな瞬間がやって来るたびに，先立つ瞬間はある変容を蒙る。私はその瞬間をなお手中に保持しており，その瞬間はなおそこにあるのだが，しかしそれは既に沈降し，現在の線から下降している。それを保持するためには，

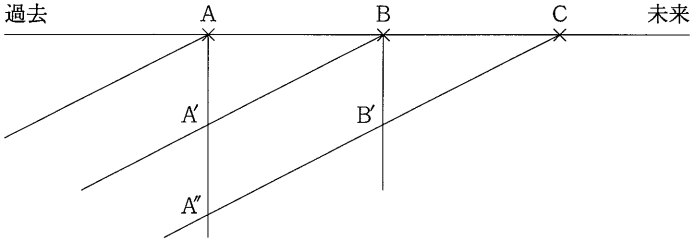
4）*Ibid.* p. 476.

時間の薄い層を通して手を伸ばさなければならない。」[5]

時間の薄い層とは，私による私の状況の乗り越えによって構成された時間の層であり，私の企投が作り上げた時間の層である。先ほどまで現在であった瞬間が今は，時間の層を通して，ある時間的隔たりを介してしか姿を現さない。さらに次の瞬間が来ると，それはさらに変容を蒙って，過去把持の過去把持になる。

「目立たない瞬間とか，分離しうる射映はなく，全てが一緒に動く時間性の連続的な移行がある。そこではそれぞれの未来把持は気がつかないうちに過去把持へと移行し，それぞれの過去把持は，過去把持の過去把持へと移行する。そこではそれぞれの未来把持は，現在を通過することによって過去把持へと移行しつつ，新しい未来把持を生み出す。」[6]

現前野において，かって「いま」であった過去把持が，時間の層を介して射映するのであり，現前野を構成するそうした志向性の錯綜が時間を構成しているのである。



フッサール（『時間意識』p. 22）による。
水平線＝今の系列。斜線＝後続する＜今＞から見られた同じ＜今＞の射映。
垂直線＝一つの同じ＜今＞の射映。[7]

すなわち，メルロ＝ポンティが，フッサールが『時間意識の現象学』において描いた図式を通して説明するがごとく，Cである「いま」から，かって「いま」であったA，Bが変容されたものとして，A′ A″ B′ として見える。

5）*Ebenda.*
6）A. de Waelhens : *Une philosophie de l'ambiguité*, Édition Nauwelaerts, Louwain, 1978, p. 298.
7）*P. P.* p. 477.

図ではCが「いま」であり，私はCという「いま」において世界に面しているのであり，したがってCが私の現前野にほかならない。そのCから，私による状況の乗り越えによって，かって今であったＡＢが過去へと滑り去ることによって，A″B′と変容を蒙ったかたちで，現前野Cを構成する志向性を通して見えるのである。つまり私という存在が，脱自的に世界へと超越し，私の状況を乗り越える試みにおいて，時間層はＡからＢへ，ＢからＣへと移行し，ＡとＢは，今という時間的側面から脱去することによって，Ｃという現前野を構成する志向性の束によって，過去把持されることにより，A″B′へと変容する。つまり今であるＣからＡＢを隔てる時間層を通して，あるいは私がＡＢという，かっての「いま」を乗り越えて，私の存在を構成する諸状況を組み換えた諸契機を通して，ＡＢというかっての「いま」は志向的に把握されるのである。したがって「私に与えられているものは，A′を通してすかして見えるＡであり，つぎにA″を通して見えるこの全体であり，以下同じである。それはあたかも上を流れる水を通して川底の石それ自身が見えるようなものである。」[8)]

すなわち，私は「いま」であるＣにおいてＡＢという時間地平を，A″B′を通して結合し，それをＣである現前野に重ね合わせるのであるが，それはカントがいうごとく知的結合によって為されるのではなくて，私が面するＣという現前野を超出する私の実存的運動において把握されるのであり，その乗り越えの運動が，ＡＢという時間地平を保持しているのにほかならない。

私による現前野の乗り越えによって，ＡがＢへと移行し，さらにＣへと移行するのであり，そしてその私の実存的運動により，ＡがA′へと移行し，さらにA′からA″へと移行し，ＢもB′へと移行するという，移行の運動が生ずるのである。つまり，現前野の乗り越えによる，現前野の構造転換によって，現前野において錯綜する志向的連関としての時間的統合は，全体として転換する。すなわち「いま」としての現前野であるＣも，次の瞬間には，すなわち私による現前野Ｃの乗り越えによって解体し，「いま」から脱去するのである。

8）*Ibid.* p. 478.

したがって，「時間とは，この遠心的運動を支配する唯一の法則である自己からの逃亡，あるいはハイデッガーがいうごとく＜脱－自（ek-stase)＞以外の何ものでもない。」[9)]

この自己からの逃亡，あるいは脱自の運動によって，志向的連関としての時間的統合全体の構造が変化するのである。つまり，かって未来把持であったCが「いま」へと移行することにより，A′がA″へ，BがB′へと移行するという，時間的な志向構造の全体的連関が変化するのである。そして，ABCという時間的連関は私の実存運動において，つまり脱自において，一連の繋がりを保持しているのであり，AからBへ，BからCへの移行の中で，それらは統合されて，現前野を構成しているのであるといえる。すなわち，時間において，「いま」へと到来することによって，現在において存在を確保するということと，それが現在から脱去するということとは同じことであり，絶えざる移行が為されているがゆえに，すなわち時間的存在である私が絶えず己れを乗り越えることによって，新たな「いま」を到来せしめているがゆえに，「いま」を確保した存在は「いま」からの脱去として有る。しかし，私の絶えざる実存運動によって，絶えず解体される「いま」としての現前野は，それがその実体性を解体され，「いま」から脱去することによって存在を奪われるのではないのであり，それは既に述べたごとく，変容を蒙ったかたちで私の現前野を構成する志向性の錯綜態において維持されることによって，時間的地平を構成しているのである。つまり，現前野が時間的地平を有しているのは，現前野を構成する志向性の錯綜態が過去を維持し，未来をあらかじめ描いているからである。

「時間は己れが有らしめたものを追放すると同時に有らしめる。何故ならば，新しい存在は，先立つものによってあるべきものとして告げしらされていたからであり，後者にとって，現在に成ることと過ぎ去るべく定められていることとは，同じことである。」[10)]

9）*Ibid*. p. 479f.
10）*Ibid*. p. 480.

現在は，それが存在へと至ることによって現在から追放した過去を保持しており，また未来をも先取りしているのであり，そうした志向性の錯綜態が現在にほかならない。

「もし私が私の現在を生き生きとした姿で，それが含蓄するすべてと共に捉え直すならば，その現在の＜中には＞未来と過去へ向かう脱自が有り，これが時間の諸次元を敵対的なものとしてではなく，互いに分離されえぬものとして現出せしめる。」[11]

（2）

時間の諸次元は，私が現前野に面し，それを乗り越える試みにおいて，互いに結合しているのであり，分離しえないものとして，私の存在において保持されているのにほかならない。つまり，時間の諸次元は移行の総合として，私の実存的運動の中で絶えず構造転換しつつ，ある統一を保持しているのである。先の図に則して述べたごとく，ＡからＢへ，ＢからＣへと現在の移行が為されるにつれて，現前野の構造転換が生起し，そのことによって志向的連関としてのＡＢＣは，A″B′といったかたちで変容したものとして過去把持される。すなわち現在であるＣにおいて，A″B′は過去把持されることによって，現前野において保持されているのであり，それらは志向性の錯綜態としての現前野において時間地平を構成する契機となっているのである。したがって，時間の諸次元は，志向性の錯綜態において，相互に差異を保持しつつ重なり合っているのである。つまり，時間とは主体性であり，主体としての人間存在による絶えざる実存的運動において，時間が生起するのであるといえる。自然科学が扱う客観的時間，人間存在がこの世に存在する以前の何十億年前から流れてきた時間，あるいは人間がこの世から消滅して後にも，延々と続くであろう時間的流れは，人間存在の主体的有り方と関わりのない所で流れているかのごとき観を与えるが，しかしそうした客観的時間を客観的時間として，ある基準を設定して測定する主体としての人間，つまり

11) *Ibid.* p. 483.

時間的存在としての人間による脱自的有り方において時間的な諸層を分泌する行為がないならば，そうした客観的な時間も時間として成立しえないだろうし，知り得ないであろう。

すなわち，「世界は人間的意識以前に存在していたということによって，人はいったいなにを言いたいのだろう。例えば，地球は太初の星雲の産物なのだから，そこでは生命の諸条件が整っていなかった，と言いたいのかもしれない。しかし，これらの言葉のおのおのは，物理学の一つ一つの方程式と同時に，世界についての我々の前科学的経験を前提にしているのであり，生きられた世界へのこの参照が，その真の意味の構成に力を貸しているのである。誰も見たことがない星雲なるものが何であったかを私に理解させてくれるようなものは，何ひとつない。ラプラスの星雲は我々の背後，我々の起源に有るのではなくて，それは我々の前，文化的世界に有るのだ。」[12)]

つまり，宇宙の起源に存在していたとラプラスがいう星雲は，ラプラスという時間的存在としての人間の前科学的な世界経験に，つまり前科学的な時間的経験に基づくのである。人間存在が過去，現在，未来を志向的に把握し，過去，現在，未来へと自らの存在を介在させているがゆえに，人間存在の経験を越えた事象に対して時間性を投射し，一定の基準を設定する中で，その基準の枠組みの中に事象を当てはめることができるのである。時間的な基準は，人間存在の時間的経験を凝結させたものである。人間存在にとって，時間は絶えず移行してゆくものであり，絶えざる動きにほかならないのであるが，それを固定することによって，客観化したものが時間的基準であり，それは天体の運行に基づくものであり，ハイデッガーが世界時間と名付けたものである。人間存在が自らの時間経験に基づき，時間を自らの経験を越えて延長しうるのは，この時間の客観化としての世界時間によるのであるといえる。すなわち，そうした客観化された世界時間を人間が手にすることによって，人間はそれを武器にして，時間の層を無限に切り開くことができるのである。

12) *Ibid.* p. 494.

メルロ＝ポンティがいうように，われわれにとっての一日の始まりはすでに遠ざかっているが，われわれにとっての一週間のはじまり，あるいは一カ月のはじまり，一年のはじまりは固定したままであり，それは列車の窓から見える風景の中で，踏み切りは疾風のごとく遠ざかるが，遠くに有る丘はほとんど動かないごとくであるのは，彼が述べているごとく，移行の統合として，時間的地平において，一連の時間的な継起の層に重ね合わされたものとして姿を現しているのであるが，そうしたことが可能であるのは，われわれが客観化され凝固した時間測定基準を時間地平に投射しているからにほかならないのである。つまり，移行の統合として，志向的連関において過去把持された週の始まりが，固定的な点として私の時間性に現れるのは，私が客観化されたものとしての時間測定基準に基づいて週の始まりを捉えているがゆえである。何故ならば，週の始まり，月の始まり，年の始まりといった時間規定そのものが，既に時間測定基準というフィルターを通して時間を見ていることに基づいた時間の捉え方にほかならないからである。したがって，人間存在の実存運動に基づく，瞬間瞬間が移行する時間が，メルロ＝ポンティがいうごとく，あたかも列車の窓から踏み切りが疾風のごとく過ぎ去って行くごときに見えるのは，それが人間存在によって生のまま経験される時間であるがゆえであり，客観的時間測定基準に基づいて見られた時間ではないからである。それに対して，週の始め，月の始め，年の始めといったかたちで把握される時間は，人間存在が経験する時間を，客観的測定基準によって設定しているがゆえであり，客観的時間測定基準が，人間存在の時間経験を固定し，凝固せしめるがゆえである。つまり客観化され固定された時間点は，それが五分前の時間点であろうと，五分前と設定し，客観化する限りにおいて，それは客観的時間測定基準からすりぬけて，移行しつつある，現に経験する時間体験が，固定されえず，把握されえないのに対して，凝固した時間なのである。

「時間性は，私自身への私自身の現前への私の生の全き基本的現前の上に確立される。……私が私の過去と未来に向かって緊張し始めるのは，私がそ

こに居るという時間から出発してである。」[13]

既に述べたごとく，メルロ＝ポンティの時間論において，現在にある特権が与えられる。つまり，私による現前野への臨在，客観化されたり，凝固されたりしえない，私の実存運動の真っ只中において生きられる時間を基盤にして，過去と未来への展望が開かれるのであるといえる。そうした，生きられた時間，私の実存運動のただ中において体験される時間は，ドゥ・ヴァーレンが述べているごとく，私自身への私の現前である，ということもできる。つまり，世界への私の臨在は，世界へと臨在している私への私自身への現前であり，そうした世界へと臨在している私を，私が把握するところに，私がその世界への臨在を乗り越える運動の中で生起する時間の移行が把握されるのである。つまり，私が過去へと，あるいは未来へと開かれて有るのは，私が世界へと臨在している私自身へと現前している限りにおいてである。先に述べた，時間の移行的総合，現在CからA″B′を志向的に把握し，また現在Cの後に来るであろうDを予め描写することができるのは，時間的生起の源泉である私による世界への臨在，つまり現前野へと臨んでいることへと，私自身が現前している限りにおいてである。過去把持，未来把持は，そうした私への私自身の現前において生ずるのであり，志向的連関において過去を保持し，来たるべき未来を予描することができるのは，世界へと臨在している私を私自身が何らかのかたちで把握しているということの中で可能なのである。すなわち，私による現前野の乗り越えの運動において生ずる私を取り囲む現前野の構造のズレの把握は，つまり一瞬前に私が面していた現前野と今私が面している現前野との差異の把握であり，それは現前野へと面している私の把握を介した過去把持の中において可能となる。言い換えれば，過去把持，未来把持は，私の世界への臨在の把握，つまり現在を捉えることを媒介として可能なのである。つまり，過去把持，未来把持は，私の世界への臨在の把握の一変容態なのであるといえる。

「もし主体性が時間性であるならば，自己措定も矛盾ではなくなる。何故

13) *Une philosophie de l'ambiguité*, p. 303.

ならば，それこそがまさに生きた時間の本質を示すものだからである。時間とは<自己による自己の触発>である。つまり触発するものは未来への推力ならびに移行としての時間であり，触発されるものは，諸々の現在の展開する系列としての時間である。時間の推力とは，一つの現在からもう一つの現在への移行以外のなにものでもないが故に，触発するものと触発されるものとは一体を為している。この脱-自，自己に現前している項へ向かっての不可分の力のこの投射，これこそ主体性である。根源的流れは単に存在するだけではないと，フッサールはいっている。つまりそれを意識するために，その背後にもう一つ別の流れを仮定する必要はなく，それは必然的に<自己自身の現れ（Selbsterscheinung)>を，おのれに与えなければならない，ということである。この流れは，<自己自身において自己を現象として構成する>。つまりただ単に事実上の時間，あるいは経過する時間であるにとどまらず，またおのれを知る時間でもあるということが，時間にとって本質的なことである。」[14]

したがって，メルロ＝ポンティのいう現在の特権とは，世界への現前という志向性の錯綜態への自己の現前を媒介にした，現在という意味での現在であり，そこから時間は過去と未来へと開かれるのである。

（3）

以上述べたメルロ＝ポンティの時間論を基礎にして，メルロ＝ポンティの言語論の基礎付けを行う。メルロ＝ポンテイ自身，言語という問題領域と時間という問題領域とを関連させて論じているところはない。時間の問題に関してメルロ＝ポンティが述べているのは，主著である『知覚の現象学』のわずか26ページのみであるが，言語の問題に関しては，『知覚の現象学』においても，第一部の一章を割いて論じているし，それ以降の著作においても，むしろ言語の問題はますます重要度を増してきている。時間の問題から言語の問題へとアプローチする試みは，ハイデッガーが『存在と時間（Sein und

14) *P. P.* p. 487.

Zeit)』において，時間の問題を介して存在を解明しようとする試みに習ったものである。われわれは時間的な流れの中で様々な行為を為しているわけであり，われわれの所作と時間の問題は切り離しえないものである。われわれの言語行為も同じく時間的経過の中で為されるわけであるが，言語の有する本性そのものが時間性から解明されうるものではないか，というのが本論の目論みである。

『知覚の現象学』において，メルロ＝ポンティは，言語行為を身体の所作の一環として位置付けている。すなわち，身体の世界への内属，言い換えるならば身体の世界内存在としての有り方の一つとして，言語行為がある，というのがこの時期のメルロ＝ポンティの言語についての考え方である。すなわち，「彼は言語の意味する機能を，我々の世界との知覚的接触において基礎付けようと試みる。」[15]

言語以前に，漠たる思惟，形の無い思惟があって，それに言語が外皮のごとく形を与えるのではなくて，「語は，対象や意味の単なる標識であるどころか，事物の中に住み込み，意味を運搬するものでなければならない。したがって，言葉は発語するひとにとって，既成の思惟を翻訳するのではなくて，思惟を完成するのである。」[16] そして，そうしたことが可能であるのは，身体の所作的意味を土台にしているからである。「語の概念的意味（signification conceptuelle）は，言葉（la parole）に内在している所作的意味（signification gestuelle）を土台にして」[17] 作り上げられているのである。われわれは知覚によって世界に接することによって，そこから身体的所作の諸々の形態を汲み取っているのであるが，それと同時に，われわれは制度化された相互主観的言語世界に自らの言語行為の基礎を有しており，そこから諸々の言語行為の形態を汲み取っているのである。したがって，われわれが言語行為を為すのは，世界内存在としての身体の所作の一環としてであり，その一つの

15) Gary brend Madison : *The phenomenology of Merleau-Ponty*, Ohio University press, Athens, Ohio, 1981, p. 115.
16) *P. P.* p. 207.
17) *Ibid.* p. 209f.

転調としてであるのにほかならない。それゆえに，われわれは言葉を語る場合，あるいは言葉を書く場合に，いちいち言葉を表象する必要はないのであり，身体の様々な所作，例えば手を動かしたり足を動かしたりするのと同様に，身体の所作の一つとして口を動かしたり，舌を動かしたりする動作が，言葉を捉えるのである。つまり，身体の諸々の所作が言葉へと赴くのである。したがって，身体の世界の内に根ざした有り方に基づいて言語行為を考えるならば，「おそらくはおのおのの国語（ランゲ）の起源に，例えば夜のことを夜とよべば，光のことを光とよぶのも恣意的なことではないような，きわめて縮約された一つの表現体系が思いだされるだろう。」[18] すなわち，われわれの世界に根ざした有り方において，身体的振る舞いの一転調としての実存的意味（signification existentielle）の中には，ソシュールがいうごとき，能記と所記との間の恣意性はないのであり，そこには語の概念的意味のレベルにおいては説明されえない必然性が有るのであるといえる。メルロ＝ポンティは言語というものを，制度化されたものとしての体系，あるいは客観的な意味での一つの構造として理解する捉え方から，主体としての身体的主体の世界の捉え直しの能力，つまり「与えられたものとしての世界に人間による世界を重ね合わせることを可能にする情動的意味（sens émotionnelle）」[19] へと還元していく。つまり，言語というものを現象学的主体としての身体や，世界に対する能力のうちへと引き戻すことにより，構成されたものとして，思惟を規定する限りでの客観的言語から，構成する言語へと，言語を捉え直そうとする。そして，むしろそのような場面において，われわれによって現実的に使用される言語，自己と世界，あるいは自己と他者との媒介の役割を果たしている言語というものの姿が浮き彫りにされるのである。

このように，『知覚の現象学』における言語論は，身体の世界内存在としての有り方の一転調としての言語行為として，言語が位置付けられている。したがって，時間論的な言語の解明は，まず身体的所作の時間論的解明から

18) *Ibid.* p. 218.
19) *Ibid.* p. 219.

始めなければならない。世界内存在としての身体の所作，世界へと内属している身体の所作は，それ自身時間性から解明されうる。既に述べたごとく，メルロ＝ポンティの時間論は，現前野へと臨在している私への現前を軸にした志向的錯綜態にほかならないのであるが，それは身体の有り方でもある。身体が世界に内属し，そこからおのれの世界における有り方を汲み取るプロセス，言い換えれば身体図式の組み替えとしての，世界内における新しい有り方の獲得のプロセスは，当然のことながら時間的プロセスでもある。例えば，われわれがタイプライターを修得することにより，新しい世界内存在としての有り方を獲得すること，つまりタイプライターという道具を己れの有り方に組み込むプロセス，あるいは盲人が杖を使用することによって，自らの行動範囲，あるいは振る舞い様式を多様化するプロセスは，時間的なプロセスである。つまり，現前野の絶えざる乗り越えによって，過去を重層化してゆくことにより，われわれはタイプライターを自らの身体的有り方の内へと内属せしめることができるのである。あるいは盲人が杖を使用することを学ぶことにより，自らの振る舞い様式を多様化せしめることは，彼による現前野の絶えざる乗り越えによって，過去把持を重層化せしめることによるのである。習慣の獲得は，身体の志向的連関の多様化に基づくといえる。すなわち，志向連関において，過去を保持する中で，習慣は獲得されるのである。

メルロ＝ポンティにとって，身体の世界内存在としての有り方とは，身体による絶えざる世界へ向かっての企投であり，世界への絶えざる関わりにほかならなかった。それを時間的観点からいうならば，身体的主体による現前野の絶えざる乗り越えであり，時間のある炸裂である。世界内存在としての身体の，世界への絶えざる関わり，自らの有り方の，そして世界の絶えざる乗り越え，現前野への臨在としての現在の絶えざる乗り越えであり，現前野を過去へと退去せしめる絶えざる運動にほかならない。そして，そうした身体の実存運動は，志向的な連関を伴っているのであり，自らが乗り越えた現前野を過去把持において保持し，また到来すべき未来を未来把持において予描する中で，世界内存在としての身体は，自らが臨在している世界を時間的

厚みにおいて知覚するのである。

「メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』の中で述べている実存は，決して充分構成的な実存ではない。それは常にそれが自らを支えている。実存自身よりもより根源的な流れによって担われている。実存はその流れの循環，眠りついている時間を再発見する。それは，実存が創造しないが，しかしその存在の部分を為し，その相貌を描いている腐食埴土の中へ実存を根付かせる一般性において，『身体的機能』と同様の獲得された習慣の堆積である。」[20]

実存が習慣の堆積であるということ，つまりメルロ＝ポンティの言葉を借りるならば，「習慣の獲得」[21] であることは，時間の炸裂による現前野の絶えざる乗り越え，それを志向的に保持することによる，志向的連関の集積であるといえる。メルロ＝ポンティのいう志向性とは，意識レベルでの志向性ではなくて，身体の実存運動が世界へと向かう志向性であり，それはしたがって単に意識の内に記憶として蓄積されるにとどまらず，身体の行動形態の上へと積分されるのにほかならない。

そして，言語行為もそうした身体の世界内存在の一環として捉えられている。すなわち，言語行為そのものが自己による自己の乗り越えという実存運動にほかならないのであり，したがって，それ自身が現前野の乗り越えの運動にほかならないのである。つまり，現前野の乗り越えのただ中において，言語行為は為されるのであり，すなわち未来把持においてこれから述べようとすることが予め描かれているとともに，既に述べられたことが過去把持において保持されるといった志向的連関において，言語行為が為されるのである。われわれが語る言葉を一連の流れとして，ある連関を有した統一態として保持しうるのは，われわれが言葉を志向的連関の中で保持しているがゆえである。つまり，私が一瞬前に述べたことを忘れ，これから述べようとすることを，私の身体の世界へと臨在している有り方の中で保持していなかった

---

20) Michel Lefeuvre : *Merleau-Ponty au delà de la phénoménologie*, Librairie Klincksieck, Paris, 1976, p. 28.

21) *P. P.* p. 166.

ならば，私は一言も言葉を発することはできないであろう。そして，そうした私の実存運動として，私は言語行為を為すがゆえに，つまり現前野の乗り越えのただ中で，乗り越えの瞬間において言葉を発するがゆえに，言葉はそうした実存的意味が土台となって，その上に概念的意味が付着しているのである。言葉の所作的意味，実存的意味は，まさに私が言葉を語る現前野において，世界内存在としての私の身体が捉える意味であり，言葉の生きられた意味にほかならず，それは私の世界についての根源的経験に根ざしているものにほかならない。したがって，言葉の情動的意味とは，私の世界内存在としての有り方において，私が臨在している現前野の乗り越えの瞬間において語られることの中で捉えられる言葉の意味であり，それは，そうした私の実存的土台から切り離された言葉の概念的意味よりも根源的なのであるということになる。したがって，メルロ＝ポンティがいうごとく，情動的意味において，能記と所記とがある必然性を有しているのも，同じ理由なのである。つまり，私による現前野の乗り越えという実存運動のただ中において，＜夜＞という言葉が発せられる限りにおいて，意味と音とはある必然性を有するのである。すなわち，日本人が＜夜＞のことを＜y-o-r-u＞とよび，フランス人が＜夜＞のことを＜n-ɥ-i＞とよび，ドイツ人が＜夜＞のことを＜n-a-x-t＞とよび，英米人が＜n-a-i-t＞とよぶのは，それぞれの発語の仕方が，現前野の乗り越えのただ中で為されるがゆえに，そうしたこととは切り離された概念的意味とは違った意味合いを有するのであり，そこには＜夜＞のことをそのように発音しなければならない必然性があるのである。すなわち，現前野の乗り越えにおいて発語し，それを過去把持において捉える中で，それは生きられた意味として，その発音と意味とが結び付いているのである。

（4）

メルロ＝ポンティの言語理論は，『知覚の現象学』以降，『知覚の現象学』においては，既に述べたように，どちらかというと批判的であったソシュー

ルへと傾斜してゆく。すなわち，ソシュール言語学の基本的な枠組みを踏まえた上で，それをメルロ＝ポンティ自身の土俵にもって来て，議論をしているようなところがある。ソシュール言語学における基本的な考えとして，言葉の意味は，言葉と言葉との差異によって規定されるという考えがあるが，この有名な考えをメルロ＝ポンテイは積極的に取り入れる。

「我々がソシュールにおいて学んだことは，記号そのものがひとつひとつでは何ごとも意味せず，それらはいずれもある意味を表現するというよりも，その記号自身と他の諸記号との間の意味の隔たりを示しているということである。これら他の記号についても同様のことが言い得るが故に，言語は名辞を持たないさまざまな差異によってできているのである。もっと正確にいえば，言語における名辞とは，各名辞間にあらわれる差異によってのみ生み出されるのである。」[22)]

諸記号間の差異は，諸記号の総体としての国語（ラング）における諸記号の相互規定によって制限される。つまり，言語記号が単独では何ものをも意味せず，同一国語内での他の諸記号との間の連関において，その意味が規定される。つまり，諸記号は国語という言語体系を媒介として意味を付与されるのである。

「国語（ラング）は，記号（語や文法，統辞的形態）の総和であるよりもむしろ，記号を相互に弁別し，そのようにして言語の世界を構成する手段である。」[23)]

したがって，われわれにはまず言語のあるまとまり，つまり個々の記号を相互に弁別するあるまとまりが与えられるのであり，それは幼児の場合においてもそうであろう。もちろん，一人の人間に，ある国語（ラング）の総体が与えられ

22) M. Merleau-Ponty : *Signes*, Édition Gallimard, Paris, 1960, p. 49.
このことに関して Madison は，次のように述べている。"If this is the way things stand and if language is quite literally a system, a structure wherein sound and sense, thought and speech, are two sides of a single phenomenon, and if the meaning of a word exists somewhere between this word and all others and is the divergence which sets them apart ; then it becomes possible to understand the nature of the creative act, that for instance of the writer whose creative act calls forth a new meaning in the cultural world." *op. cit.* p. 112.

23) *La prose du monde*, p. 45.

るということは不可能であるが，少なくとも諸記号を弁別する記号のあるまとまり，あるいは諸記号を配列する規則としての統辞的形態というものが与えられるのであり，それを各人が相互主観的な言語的世界，つまり制度としての言語の世界の中に，己れの言語的有り方を根ざせしめることの中で，共有することにより，ある国語(ラング)が形成されるのである。したがって，国語(ラング)とは，諸記号を相互に弁別し，それを配列する規則であり，それは辞書的なかたちで諸記号の総体としてまとめあげられたものではなくて，個々人の言語能力の内に蓄積されたものにほかならない。そして，そのようにあるまとまりとして個々人に与えられた言語体系が，個々人の中で諸記号を弁別し，ある記号を他の記号から差異化させる機能をはたすのであり，個々人の言語行為は個々人のいわば言語的運動能力，つまり諸記号を弁別し，それを他の諸記号から区別して発語する中で為されるのであるといえる。したがって，言語体系としての国語(ラング)は，個々人の言語行為を離れてあるのではなく，実在としてのそうした個々人の言語行為の中で生きているのである。ここにメルロ＝ポンティとソシュールとの違いがある。つまりソシュールは国語(ラング)があたかも実在するかのごとく分析するのであるが，メルロ＝ポンティは，いわば国語(ラング)を個々人の言語行為へと還元するのである。つまり，言語において，言語行為こそ実在する言語的側面であり，制度としての国語(ラング)は，そうした個々人が為す言語行為の抽象化されたものにほかならないのである。つまり，国語(ラング)とは，言語の総体なのではなくて，個々人が言語行為を為すための道具であり，個々人が言語によって様々な事象を表現するための手段にほかならないのである。すなわち，諸記号は，他の諸記号との関係においてのみ意味を有するのであるがゆえに，諸記号はそうした諸記号の関係の体系である国語(ラング)を媒介としてのみ言語としての役割を果たすのであり，そして諸記号によって様々な表現が可能であるのは，諸記号の関係の体系としての国語(ラング)の有する統辞的規則に則らざるをえないのである。

音楽が時間的経過の中においてのみ音楽として成立するのと同様に，言語行為も時間的経過の中においてのみ成立しうる。すなわち，既に述べたごと

く，発語された諸記号がある連関の下に，ある意味を有するようになるのは，時間的な経過の中においてである。そして，ある記号が別の記号とつき合わされて，両者が差異化されるのも，時間的経過においてである。既に述べたごとく，われわれは実存運動による現前野への臨在の乗り越えにより，現前野を過去へと押し退け，未来を到来せしめるのであるが，そうした中での言語行為においては，既に発語された語を過去把持において保持し，これから発語する記号を未来把持において保持することによって，諸記号の連関としての，ある意味を有する言語行為は成立するのである。すなわち，諸記号間の差異が差異として維持されるのは，人間存在の絶えざる現前野の乗り越えによる，時間層の形成の中においてである。もちろん，われわれは言語行為を為す限り，いちいち諸記号間の差異を意識しているわけではないが，言語行為が為される中において，すなわち構成された言語，構造としての言語ではなくて，生きた言語において諸記号間の差異が差異として生きられるのである。そして，そうした諸記号間の差異を差異として維持するのは既に述べたごとく，言語体系としての国語（ラング）を媒介にしてであるが，国語（ラング）はわれわれが言語記号を弁別する際の手段であり，表現のための道具として，個々人の言語能力に内在しているのである。諸記号を弁別する作用としての国語（ラング）は，言語行為を言語行為として成立させる根拠であるとともに，言語行為の中において姿を現すものにほかならない。言語行為を離れて，言語体系としての国語（ラング）が実在するのではないのであり，言語行為が時間的経過の中で，つまり現前野への臨在の絶えざる乗り越えの中で展開される際に，個々の記号を相互に弁別し，一連の過去把持，未来把持の中で諸々の記号を配列し，それをその一連の記号の繋がりの中で位置付けて，例えばフランス語ならば，動詞の変化，冠詞の変化を規定する。われわれは言語行為を為す場合に，現前野において臨在している瞬間に発語する記号を，過去把持において維持している記号との繋がりの中で，あるいは未来把持において維持している記号との繋がりの中で，それらとの関係性において規定するのである。つまり，諸記号の弁別作用としての体系としての国語（ラング）がその機能を発揮するのは，時間的

展開としての言語行為の中においてであり，それ以外の所においてではないといえる。語の統辞法が展開されるのは，時間的経過の中においてであり，つまり，現実の言語行為においてである。われわれが言語行為において，言葉を選ぶのは，既に述べて，過去把持された言語連関と，これから述べるために未来把持している言語連関との関係性においてであり，したがって，現前野への臨在の乗り越えとしての言語行為は，過去把持と未来把持という志向的連関との関連性において為されるのにほかならない。そうした，時間的展開として為される言語行為の中に，言語体系としての国語（ラング）は内在しているのであり，それは語と語との連関，諸々の語の連関の中での一つ一つの言葉の位置，動詞の語尾変化，冠詞の変化，あるいは諸々の変化を規定しているのであり，それゆえそれが顕現されるのは具体的かつ現実的な言語行為においてである。すなわち，言語体系の有する体系性は，具体的な言語行為を離れて存在するのではないのであり，時間的展開としての言語行為において，国語（ラング）の有する諸々の規則がその規則性を発揮するのであるといえる。そして，記号と記号との間の差異は，既に述べたごとく，現前野への臨在における言語行為において生きられた差異であり，概念的な差異ではない。それは，語と語を結び付ける規則としての国語（ラング）が顕現する場としての時間的展開において，現れるのである。つまり，ある記号と他の諸記号との間の差異は，現実的な言語行為において，つまり，国語（ラング）の諸規則が現れる言語の時間的展開の中で現れ，実現されるものである。言語行為において，現前野への臨在の乗り越えとしての発語と，既に発語され，過去把持された言葉との間の差異，つまり言語行為において形成される一連の言語連関において，諸々の記号はそれぞれその言語連関の中で位置付けられ，他の諸記号との関連性において現実的に直面するのであり，その場合に差異化が現れる。あるいは，国語（ラング）が諸記号を弁別し，諸記号を言語行為の中で位置付ける場合に，既に差異化が為されているといってもよい。つまり，諸記号間の差異は，言語体系としての国語（ラング）による弁別作用によって為されるのであるがゆえに，われわれが言語行為を為している瞬間において，その弁別作用が作動し，諸記号を差異化し

ているのであるといってよい。しかし，そうした国語による諸記号の弁別作用，諸記号の差異化は，われわれが時間的経過において，言語行為を為すときにおける志向連関において維持されるのである。つまり，諸記号は，言語行為において相互に弁別され，他の記号との間に差異を分泌することによって，自らの有する意味性を浮き彫りにするのであり，諸記号が差異化される場は，具体的な言語行為においてであるといえる。つまり，現前野への臨在の乗り越えのただ中において，われわれは発語をするのであるが，その発語それ自体が，既に国語(ラング)の有する弁別作用によって規定されているわけであるのであり，すなわち私がある言葉を選ぶということは，私が選ばなかった言葉，つまり発語した言葉と隣接する言葉との間の差異化の下で，その言葉を選んだのであり，したがって具体的な言語行為においてのみ，国語(ラング)の有する規則の現実的作動としての差異化作用が為されるのであるといってよい。つまり，諸記号間の差異化は，私の現実的な言語行為において為されるのであり，私が言語行為を為す際に，言葉を選ぶという行為を為すこと自体が，差異化の行為の遂行にほかならないのである。したがって，差異化は，私が言語行為を為す瞬間に，つまり現前野への臨在を乗り越える瞬間において為されるのであるといえる。あるいは，私が為す言語行為そのものが，現前野の乗り越えとしての実存運動なのである。つまり，そこにおいて言語体系としての国語(ラング)を構成している諸規則が作動するわけであり，したがって差異化が為されるのであるといえる。それゆえ，諸記号間の差異化の現実化は，時間の炸裂としての現前野への臨在の乗り越えにおいて為されるのであるといえる。

（5）

言語体系としての国語(ラング)は，相互主観的なものであり，制度としてある。同一言語体系共同体へと共属する人間存在が，その言語システムを共有することによって，コミュニケイションを為しているのであるが，そうしたことが可能であるのは，各々の人間存在が，制度としての言語共同体へと根ざす中

で，そこから言語体系を汲み取ることにより，差異の体系を自らのものにすることによってである。差異の体系としての国語は，言語行為において言語主体によって駆使される中で，現実化するのであり，つまり言語行為において，その体系の体系性は効力を発揮するのであるといえる。そして，人間存在が，ある言語共同体に属するということは，その言語共同体内で使用されている言語を自らの言語として身に着けることを意味する。そうしたことが可能であるのは，他者の言語行為を聞くことにより，自らの言語能力をそれへと同化することによってである。ある言葉を聞くことと話すことは表裏一体の事態であり，他者の言語行為を聞くことの中で，それの有する体系性を自らのものにすることができるのである。幼児が自分が属する言語共同体の言語を修得する場合もそうであるし，また他の言語共同体へと行った人間がそこの言語を修得する場合もそうである。他者の言語を聞くことの時間性も，結局自らの言語行為における時間性と基本的には同じである。現前野への臨在において，あるいは言い換えるならば，他者への臨在において，他者の語る言葉を聴くことと，既に聴いた言葉の過去把持と，次に聴くであろう言葉の未来把持の志向的連関の中で，われわれは他者がいわんとする事柄を聴くのであり，理解するのである。そうした志向的連関の中で，他者が語る言葉を聴き，理解することの反復において，私は他の言語共同体の言語を修得するのである。他の言語共同体へと，自らの言語能力を同化するプロセスは，他者の言語行為を自らの志向的連関の内で，つまり絶えざる過去把持，現前野への臨在，未来把持の反復の中で，一連の記号連関の統一性を捉える中で，他者の言語行為における発語された音声の中に意味を汲み取り，志向連関が捉える一連の音声の流れの中に，言葉を聞き取る分節化が為されるプロセスが有る。すなわち，他者の言語行為において発語される事柄を，一連の記号の連関として保持しうる場合，すなわち発語された言葉を過去把持と未来把持において保持し，次に発語される言葉を過去把持された言葉と結び付けて把握する場合に，一連の記号連関をそれとして把握することができるのであり，その場合に，人は自らを言語共同体へと同化せしめうるのである。つま

り，他者の言語行為において発語される言葉を，一つ一つの記号として分節し，それを一連の記号連関として過去把持，現前野への臨在，未来把持において保持しうる場合に，他者の言語行為をそれとして理解しうるのである。そして，そのことにより，人は言語主体として，その言語共同体へと自らを同化せしめて，言語体系としての国語を相互主観的に共有しうるのである。

言語体系としての国語によって弁別され，差異化される個々の記号の一つ一つは，差異の体系の中で使用価値を持ち，意味を持つのであるが，それらが相互に繋がりがあって，一連の言語記号の集合体を形成する際に，個々の記号の意味を止揚した，記号連関の構成が分泌する意味が浮かび上がってくるのである。

「一つ一つの形態素は，それだけ孤立させうるような意味する力をもっていないが，しかし，言語行為の中で，あるいはよくいわれるように，言語の連鎖の中で結びあわされると，それらは全体としてある否定できない意味を構成する。言語の明晰さは，言語の背後に，我々が我々の背後にもっているであろうような普遍文法の中に有るのではなく，言語の手前に，つまり紙の上の一つ一つの文字や声の一つ一つの抑揚の微細な動きがその意味として地平において示しているもののうちに有る。」[24]

個々の形態素は即自的に意味をもつのではないが，それが言語行為において，個々の記号が結び付く中において，意味を有する。例えば，メルロ＝ポンティが指摘するごとく，古代ギリシア語の小辞 ἄν は，他の言語に翻訳出来ないというだけではなく，ギリシヤ語においても定義出来えないものである[25]。それはヴァンドリエスがいうごとく，「辞書の上ではそれらの語を訳すことはできない。それらは具体的意味はなく，それらは語というよりも，むしろ係数であり，指数であり，代数的価値である。さらに，それらは孤立しては存在しない。それらは他の言語的要素に接する場合に，その意味をとる。」[26]

---

24) *Ibid.* p. 41.
25) *Ebenda.*
26) J. Vendryes : *Le langage*, Édition Albin Michel, 1939, p. 88.

それらは意味を有するというよりも，使用価値をもっている言語的道具でしかないのである。

要するに，個々の記号や形態素がある意味を有するようになり，また惰性的な意味を越えて新しい表現的意味を維持するのは，言語行為において，他の諸記号と結び付くことによって，一連の記号の連鎖を形成する場合においてである。そして，それらの諸記号の連鎖が分泌する意味は，諸記号の連鎖の背後にあるのではなく，まさに記号の連鎖そのものの中に有るのであり，記号と記号との結び付きの仕方そのものが意味を表すのであり，あるいは個々の言語記号が惰性的な意味を越えて，新たな表現的意味を獲得するのも，そうした個々の記号の連鎖においてであるといえる。

そして，そうした諸記号や形態素が他の記号と結び付くのは，つまり言語行為が為されるのは，時間的展開の中においてであり，つまり人間存在の現前野への臨在の乗り越えのただ中においてであるといえる。つまり，現前野への臨在の乗り越えによって，現前野を過去へと押しやる中で，それを過去把持において保持する限りにおいて，語と語とは結び付くのである。現在において，つまり現前野への臨在において発語されるのは一つの記号のみであり，それがわれわれの言語行為において，他の諸記号との連鎖の中で，国語（ラング）の弁別作用によって，他の諸記号と差異化されつつ規則に則って結び付くのは，既に発語され，過去把持された語との連関においてであり，あるいは未来把持において，正に発語しようとする語との連関においてである。すなわち，言語行為によって構成される諸記号の連関全体の中において，その全体を構成する諸記号は意味を有するようになるのであり，一連の諸記号連関の全体を媒介して，諸記号は意味を分泌するのである。すなわち，言語行為の中で，既に述べた能記と所記とが必然的に結び付いている生きた記号が生起するのであり，概念的意味においては捉えられない，記号の実存的意味が分泌されるのであるといえる。

既に述べたごとく，現前野への臨在は，現前野へと臨在している自己への現前であり，自己の把握，自己についての意識にほかならないのであるが，

そこに志向性の錯綜態が有るのであり，過去把持の一連の繋がり，つまりA″B′の保持があり，未来についての予描がある。したがって，そうした自己への現前において自己が発語した記号，つまり現前野の乗り越えによって過去へと押しやられた記号が保持されるのであり，過去把持されるのであるといえる。すなわち，諸記号の一連の繋がりが出来上がるのである。すなわち，自己への現前において時間性が凝縮されて，一連の過去，未来が保持されるのであり，そのことにより，諸記号は生きられた意味，つまり現前野の乗り越えのただ中において発語され，捉えられた意味が分泌されるのであるといえる。

「言語の意味は，我々に対して言語のそうした作用を開示すると同時に，隠してしまうのであり，その意味がひとたび生まれると，惰性的記号と単純に対応しているように見えるであろうが，言語はそうした意味を担う以前に，その内的配置によって，諸々の意味がそこにおいて先取りされるようなある根源的意味を分泌するのでなければならない。したがって，構成された言語の下に位置し，言葉の抑揚や言葉の連鎖をそれ自身で表現的なものとして考察し，既存のすべての分類法の手前にある，言語行為（les actes de parole）に内在する＜言語的価値＞」[27] というものがある。

そして，「現実的な言語の使用において，その無数の所作が交差するところに，結局は，諸々の記号が言おうとする意味が現れてくるのであり，そしてそれによって意味への到達が容易になり，我々は意味を目指すのに諸記号を必要としないまでになるからである。」[28]

つまり，未来把持と多様な過去把持が交差する現前野への臨在において，諸々の記号の意味が見えてくるのである。現前野において，つまり自己への現前において，A″への志向，B′への志向系列が交差し，またまさに述べんとする言葉についての未来把持が交差しているのであり，そこにおいて意味が現れてくるのであり，そうした意味を意味として生き，捉えるのは，現前

27) *La prose du monde*, p. 44f.
28) *Ibid*. p. 146.

野への臨在における自己への現前にてである。

ソシュール言語学は，語る主体の言語行為を括弧に入れることによって，言語体系としての国語のもつ体系性，構造性に着目するのであるが，そこにおいて形式化された言語のもつ体系性が顕現される。それは，いわば無数の言語行為の痕跡にほかならず，無数の言語行為の錯綜の結果を形式化することによって構成されたシステムにほかならない。つまりそこではわれわれが現実的な言語行為において捉えうる生きられた言語の意味は滑り落ちているのである。メルロ＝ポンティは，『知覚の現象学』以降，ソシュールにより接近しながらも，言語の主体への還帰を試みたのであり，ソシュール的な言語構造を，言語主体が言語行為を為す場面へと移行せしめる中での言語の考察を行ったのであるといえる。